仙台北三番丁教会説教　笠間良牧師　二〇二四年　五月　一二日

「誰も行けない場所」　ヨハネによる福音書　七章　三二節～　三九節

本日の週報の週録で五月九日の昇天日について書かせていただきました。ペンテコステの一〇日前にイエス様は天に昇られました。その際、イエス様は弟子達に聖霊がやってくることを告げています。この聖霊の力こそ、私達に与えられる最大の力となります。聖霊には多くの力がありますが、今回お話しするのも聖霊の力の一つについてです。

世界中には現在もたくさんのキリスト教文学と呼ばれるものがあります。過去ヨーロッパでは全ての価値観はキリスト教でしたので、あらゆる文学作品はキリスト教文学とも言えますが、これらの大半は何世紀も昔に書かれたもので、その時代その時代に、人々を力づけるものとして、あるいは娯楽としてしっかり根付いていました。日本でも何作もあります。有名なものとして遠藤周作の「沈黙」や「深い河」などがありますし、三浦綾子の「氷点」など、今も普通に文庫本などで手に入るものが多くあります。

では全世界を通して今世紀最も読まれたキリスト教文学は何だと思いますか？それはシェンケヴィチというポーランドの作家が書いた「クォ・ヴァディス」という作品とされています。この小説が世界中で大ヒットしたため、著者のシェンケヴィチは一九〇五年に第二回目のノーベル文学賞をもらっています。

内容は、西暦一世紀のネロという皇帝の時代を舞台にしています。貴族の若者がキリスト教徒の女性と知り合い、結ばれるまでのラブロマンスなのですが、その背景にネロが行ってきたキリスト教の迫害があります。この迫害によって、聖書に書かれています使徒であるペトロとパウロが処刑されるシーンも描かれます。歴史を背景とした大作恋愛作品であり、赦しの物語でもあります。文学としては大変素晴らしい作品になっています。

タイトルにもなった「クォ・ヴァディス」という言葉は劇中のクライマックスで語られる言葉です。これはラテン語で、「クォ・ワディス・ドミネ」という言葉の一部です。意味は「主よ、何処に行き給うか」あるいは「イエス様、あなたはどこに行かれるのですか？」とイエス様に対して問いかけた言葉です。

実はこの言葉はヨハネによる福音書の言葉が元になっています。二つありまして、一つは一三章三六節で、弟子のペトロがイエス様に向かって言った言葉です。そしてもう一箇所、本日の聖書箇所七章三二節以下の言葉です。ここでは弟子ではなく、エルサレムでファリサイ派のユダヤ人がイエス様に対してこの言葉を語っています。シチュエーションは全く異なりますが、イエス様がおっしゃる答えは同じ事を意味しています。

三三節と三四節でイエス様は「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない」と語っています。

ここにいるユダヤ人達にとってこの言葉は意味が分かりませんでした。目の前にいて語っているこの人物、突然私はいなくなると言っているし、そこには誰も行くことが出来ないと言っている。一体この人は何を言おうとしているのだろうか？と考えました。

彼らが考えたのは三五節で出ています。「わたしたちが見つけることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか」と書かれています。当時ユダ

ヤ人達は世界中に出ていて、ギリシアやローマにも多数のユダヤ人達が自分たちの共同体がありますので、そのどこかに行くのだろうか？と言うのが彼らの考えでした。「誰もついて来れない場所」というのを、ここから最も遠い場所と考えた訳です。最後の三六節にはユダヤ人の言葉で「『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と彼は言ったが、その言葉はどういう意味なのか。」」と語っていますが、ここにはその答えは書かれていません。イエス様も口をつぐんでしまったようです。

しかし、この答えはキリスト教信徒なら分かることです。

イエス様がおっしゃっていることは、この世界とは別なところに行くということです。「遠く」と言われると、物理的な意味で外国とか考えますが、イエス様のおっしゃる「遠く」というのは、生と死を超えたところにあります。そこが重要です。

これの意味するところは、まず十字架を指しています。十字架は処刑道具であり、そこに向かうと言うことは死を意味しています。ですから、まずここで死の世界まで誰もついてくることは出来ないという意味があります。

今あなた方は私を逮捕しようとしているが、それは今ではない。だがやがてあなた方は私を捕らえ、十字架へと連れて行くだろう。そこで死に向かう私にあなた方はついて行くことは出来ないと語り、イエス様は既にご自身の死を預言されていると言えます。

確かに死んでしまったら、そこについていくことは出来ません。しかしイエス様の教えではその先があります。

ユダヤ教の考えでは、死の先と言うことは分かっていません。神様からそれについて教えられていないからです。ただ、旧約聖書には何カ所か、神様によって人が天の上に連れて行かれたと書かれた箇所があります。有名なのは列王記下の二章に書かれているエリヤの話で、エリヤは神様によって生きたまま天に昇ったと書かれています。ですから、ユダヤ教の人々にも、特別に選ばれた人は神様によって天の国に連れて行かれるとは分かっていました。彼らの考えでは、天国と言う概念はありました。しかしそれは神様に認められた本当に限られた人だけがいける特別な場所です。

イエス様が誰も行くことが出来ないはずの場所に行くと言うことは、私は神の国に行くのですよと言っているわけです。今は私しか行くことが出来ない場所であなた方はまだそこに来ることが出来ない。という言葉となります。

ここでイエス様がお話しした時点では誰もそのことを知ることは出来ません。それができるようになったのがイエス様の十字架の出来事でした。

イエス様が十字架に付けられて殺される意味とは、先に死の世界にイエス様が行き、そこで扉を開いて人を迎え入れようとすること。つまり全ての人たちが神の国に入るための準備をするために出かけようと言う事になりますね。今はあなた方には行けない場所に私は行く。しかしあなたがたは、やがてそこに行けるようになる。という続きがあってこそ、この言葉には意味が出ます。冒頭で週録についてお話ししましたが、そこでイエス様の昇天の意味は、地上と神の国の間に道を作ることと書かせていただきました。

イエス様がこの世界に来られた意味は、ここにあります。つまり全ての人が神の国に入れるようにするため、その道を作りに来たと言うことです。イエス様は私たちのために命を捨て、その命をもって私たちを天の国に迎え入れて下さいます。ここでイエス様がユダヤ人に語ったのは謎めいた言葉ですが、将来の約束、つまり神の国に入れるようになることを約束していますが、それはあくまで未来の約束です。一方、イエス様は三七節以下で、未来ではなく今の約束を伝えています。

その後の三七節と三八節で「渇いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」とあります。イエス様は聖霊を水にたとえてこのように語りますが、イエス様が私たちに与えて下さる聖霊は、私達を神の国に連れて行ってくれるということをここで語られています。イエス様が十字架に掛けられていないこの時は、まだ誰も神の国に入ることは出来ません。しかしイエス様の十字架と復活を経て、私達に与えられる聖霊は、私達を神の国に導いてくれるものです。

聖霊には、今の私たちにとって日々生きるための力でもあります。神様が共にいてくださるという実感を与え、毎日を生き抜くために心に与えられる力であり、心の糧です。

そしてその聖霊によって私たちは神様の元に連れて行かれます。そんな私達を神様はよくやったと迎えて下さいます。それが聖霊を受けるということです。

信仰生活とは、聖霊とともに歩むことです。それはひたすら神様と共にあると言うことでもあります。